



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第20主日 A年(2023年8月20日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 56章1、6—7節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 11章13—15、29—32節

福音朗読：マタイによる福音書 15章21—28節

信仰の試練

三つの朗読から

三つの朗読に共通するのは、第一に「異邦人^{いほうじん}」です。異邦人とはイスラエルの神を信じていない人のことです。福音書^{とうじょう}に登場する「カナン^{かなん}の女」(マタ15章22節)は、神の救い^{すく}の手からもれた異邦人^{だいひょうかく}の代表格です。しかし、第一朗読^{だいいちろうどく}にあるように、その異邦人が神さまから受け入れられます。こうして神さまがおられる神殿^{しんでん}は「すべての民の祈りの家」(イザ56章7節)となっていくます。第二朗読^{だいにろうどく}では、逆にパウロが自分は「異邦人のための使徒^{しと}」(ロマ11章13節)であると宣言します。だから、異邦人が救われているのを見て、同胞^{どうぼう}であるユダヤ人も「ねたみ^{ねが}」(14節)を起こして、神の救いの手の中に入れてほしいと願っているのです。

さらに三つの朗読^{きょうつう}に共通する第二の点は、神の救いの想い^{おも}、救いの計画です。第一朗読ではイスラエルの民が救われて、続いて異邦人が救われていきます。第二朗読では逆に異邦人が救われて、それによってユダヤ人も救われていきます。いずれも神さまの救いの計画によるものです。福音^{いっけん}では一見すると、イエスさまの女性への対応^{たいおう}は冷ややかなようにも見えます。それは、イエスさまは「イスラエルの家の失われた羊^{うしな}」(マタ15章24節)のために働くのが自分の使命^{しめい}だと理解^{りかい}しているからです。それでも、「カナン^{かなん}の女」は、神の救いの想い、計画は異邦人にも向かっているのだと確信^{かくしん}をもって主張^{しゅちよう}します。そんな女性の信仰にイエスさまのこころ^{うご}は動いたのです。すべての人は、神の救いの想い、計画の元にあるのです。

説教：信仰の試練

今日の朗読に登場する女性、彼女がイエスさまに近づくためにはさまざまなハードルがありました。それを乗り越えていかなければいけませんでした。まず、女性であるということ。そして、カナンというイスラエルから見ると異邦人であること。その異邦人が「主よ、ダビデの子よ」(22節)と叫ばずにはいられないほど切羽詰まっていること。さらに、イエスさまはこの女性に更なるハードル、すなわち信仰の試練を与えます。最初の試練は沈黙です。「しかし、イエスは何もお答えにならなかった」(23節)。二番目の試練は弟子たちの無理解からくることばです。「この女を追い払ってください」(23節)。そして、三番目の試練はイエスのことばです。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにはしか遣わされていない」(24節)。拒絶のことばに対して女性はひれ伏して叫びます(25節参照)。第四の試練は侮蔑的な意味にも取れるイエスさまのことばです。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(26節)。

そんな試練の数々を経ながら、彼女は言葉を発します。それは彼女のこころを表しています。この女性は自分を「小犬」になぞらえたのです。そればかりか、敵対する民族であるイスラエルの民を「主人」とみなしたのです。神の救いがイスラエルの民を通じて、異邦人にも与えられるということを知っていたのでしょうか？ また、自分自身を「小犬」とみなして、神の前でへりくだったのでしょうか？ おそらく、神さまは、ご自分が神さまであろうとするためにイスラエルの民を救われるのだとしたら、異邦人に対しても神さまは、神さまであろうとすることを示すに違いないという信仰があったのでしょうか。

イエスさまは、この女性のことばにこころ打たれていきます。「あなたの信仰は立派だ」は「あなたの信仰は偉大だ」という意味です。女性は、神さまの救いの想いというものをしっかりと捉えていたのです。

実は、イエスさま自身も信仰の試練に直面していたのかもしれませんが。イスラエルの人々の間に信仰を見出せなかったからです。ティルスやシドンに向かったのは「信じて生きてる」人を見つける旅だったのでしょうか。異邦人世界に本当に信仰があるのかを試さなければなりませんでした。その点で信仰についての試練といえるでしょう。